

ふるさとの育む人 #30 「りんご」



育む人 **佐藤 貢さん** みつぎ 平鹿地区 56歳

生産品目：りんご 1.3畝、桃 10畝、水稲(受託含む) 3畝

昨年1月の豪雪で横手産りんごは出荷量大幅減

県内生産量の7割以上を誇る横手産りんご。雪深い産地ならではの気候が育む味わいには全国の消費者から高い評価を得ています。

昨年1月の記録的な豪雪により、横手市では、多くのりんご園地が壊滅的な被害を受けました。昨年度のJA秋田ふるさと(横手市)の出荷量は、前年の4割程度に激減。しかし、その後の当JAりんご部会員1,180人の懸命な復旧作業により、今年度の出荷量は、昨年の4割増しとなる3,840ト、販売額約9億円に回復すると見込んでいます。



甚大な被害の中、前を見続けた生産者たち

今年4月、りんご部会長に就任した佐藤貢さんの園地でも、豪雪による被害を受けました。昨年まで同部会の指導部長を務めていた貢さんは、被害を受けながらも前を見続け、「すべての樹体を守ることはできなくても、守れるものはとことん守ろう」と、自らの園地の除雪を行いながら他の生産者に呼びかけ続けました。しかし、貢さんをはじめ園地が点在している生産者も多く、「園地に行きたくても雪に阻まれて行くことができず、守りきることができないと決断しなければならぬ状況が最も辛かった」と、当時の窮状を振り返ります。



雪害を、産地基盤強化の“きっかけ”に

今年産のりんごは、開花期の低温などにより結実量はやや少ないものの、大玉傾向。しかし、今年は、例年にない高温や干ばつに見舞われたことから、これから本格的な収穫期を迎える主力品種「ふじ」の収穫を終えるまでは、少しも気を休めることはできません。そうした中、貢さんは少しでも多く園地を周り、手をかけることで、良い果実を残そうと自らを鼓舞しています。「豪雪被害は大きな痛手だが、負けてはられない。むしろ、これを契機に今後は産地の基盤をより強くしていきたい」と、産地復興にかける熱き思いを日増しに強くしています。



まさにいまが“ふんばり時”

りんごの樹体の復旧に要する時間は、少なくとも3年一。立て直し作業の成果が表れるのは来年以降となり、まさにいまが“ふんばり時”といえます。

「JA秋田ふるさと産りんごを待ってくださっている消費者のために、もう一度美味しいりんごを届けた」と笑顔で語る貢さんの眼差しからは、産地復興への強い決意が感じられます。